

## 1.2.5 吹き抜け

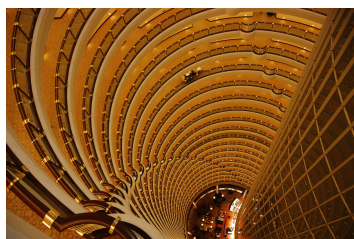
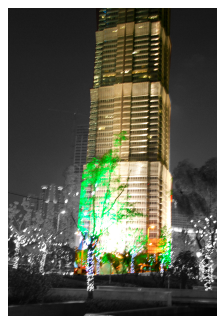


図 グランドハイアット上海  
ジンマオタワー  
(全て)



吹き抜けの効果も鉛直方向に向く。この建築的手法の興味深いところは、客観的に鉛直方向の強調を見るのではなく、鉛直方向に引き延ばされた空間の中に入るという点である。この意味で、第三章の「大空間の活かし方」の一例ともとれるが、ある一方向の強調ということで、第一章に入れることにした。吹き抜けの形状は縦:横比がより大きなものが良く、またトップライトなどと共に用いられる場合も少なくない。高層ビルの内部で最も効果が発揮されるのはこの手法である。

＜グランドハイアット上海ホテル（金茂大廈） 1998＞ 中国

スキッドモア・オーウィングズ・アンド・メルリ（SOM）設計。高さ420.5m。全88階のうち、53階から87階がグランドハイアット上海ホテルである。

このホテルの中央にある巨大な吹き抜けは、各客室に面し、直径は27m、高さは約115mである。吹き抜けの底面積に対し、鉛直方向の吹き抜け階高の比が極端に高い「縦長のプロポーション」。もともと巨大な吹き抜けだが、各階に設けられた小さなバルコニーのような凹凸意匠のずれによって、更に鉛直方向を強調（「パースペクティブ」）。黄色（金色）を貴重にした豪華な「色彩」も外部との断絶、ギャップをより強固なものとしている。

また Grand Hyatt ホテルの入っている上海金茂大廈の外観も、ビル全体が仏塔の屋根のようにリズムカルに分節され、階数が高まるごとに徐々に細くなる尖塔状になっている意匠である。一見縦長プロポーションに水平線が入るのは矛盾したようにも感じられるが、全高420.5mの高層建築であるが故に、「要素の反復」が可能。効果的に用いられている。頂点に向かって先端の細くなるタワーや高層建築に比較的用いられるデザインも、見上げた時のパースペクティブをより一層強調する意匠となっている。

現代高層ビルの高層階にホテルを建設する例は、ドバイのブルジュ・ハリファや、上海金融中心ビルなどにも共通している。これは単に客室からの眺めの良さだけではない可能性を秘めている。この Grand Hyatt ホテルにたどり着くための長いエレベーターは、第三章で述べるように、33層吹き抜けで作りに上げられた大空間に到達する前の廊下に類似する効果をもたらしている。また、音の面でも周囲の喧噪と十分な距離を取ることが可能になり、音響効果でもギャップを作り出すことが可能になっているのである。

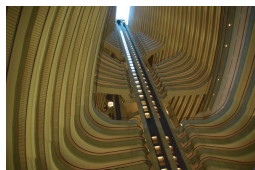
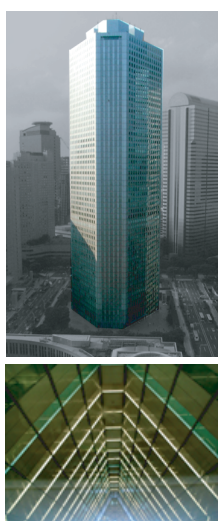


図 マリOTT マーキース ホテル

## ＜マリOTTマーキーズホテル＞ アトランタ

「空間建築」として有名なジョージア大学出身の建築家ジョン・ポーツマン設計。

このように巨大な吹き抜けはホテルに多く見られる。



## ＜新宿住友ビルディング 1974＞

外観の特徴から、通称「住友三角ビル」と呼ばれる。地上52階地下4階。高さ210.3mである。新宿高層ビル街の草分け的存在で、ビル内には多くの企業がテナントとして入る。完成当時は日本一の高さを誇った。この住友ビルを皮切りに、以降、新宿を始め、東京各地、神奈川県、大阪府、愛知県等に200m級の高層ビルが建つようになった。

ビルの構造と形が特徴的である。階層部は中央が吹きぬけ、すなわち周辺部のみのフロアとなる。この吹き抜けの存在は外部からは全く想像が出来ない。これがビルの内部とのシークエンスの効果を生んでいる。この吹き抜けの特徴は、各階の廊下と透明のガラスで仕切られていることで、完全に閉じた光庭としての吹き抜けである。

また、非常用エレベーターが利用者から見える、珍しい構造となっている（通常は荷物の搬送に使われており、一般利用者は使用禁止となっている）。

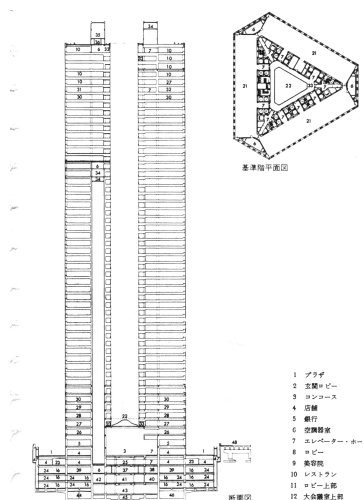


図 新宿住友ビルディング

上 外観  
中 吹き抜け  
下 図面

## 1.2.6 遠近法・錯視

実際よりも高く見せる設計手法。高層ビルの先端を細くするデザインもこの手法の一つととれる。また、鏡面を用いる場合などもある。後述する「1.2.6' 上方のぼかし」も錯視の一つ。

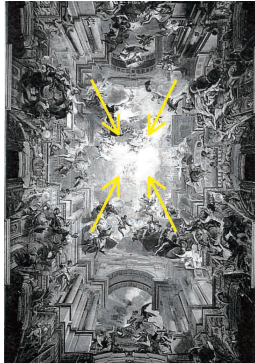


図 サンティナーツィオ聖堂

＜サンティナーツィオ聖堂の内部天井画 1691~94＞ イタリア

アンドレア・ポッツォ (1642-1709) 作『聖イグナティウス・デ・ロヨラの栄光（イエズス会伝道の実話）』。

古代ローマ美術の先例に倣う遠近法を用いた、建築物（サン・ティニャーツィオ聖堂）と天井画が一体となる建築的絵画技法を駆使し、聖イグナティウスとイエズス会の偉大な功績を、幻想的にすら感じさせる空想的な空間を構成によって劇的に表現されている。このような《アポテシオス》と呼ばれる、（遠近法などの）建築的絵画技法を用いて神や聖人を賞賛する表現形式の最も優れた作例として後世の画家に多大な影響を与えたほか、現在も数多くの人々を魅了し続けている。

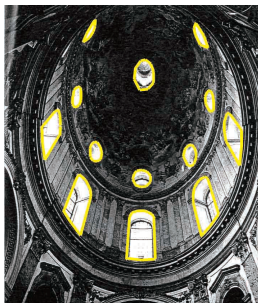


図 ザンクト・カール・ボロメウス聖堂

＜ザンクト・カール・ボロメウス聖堂（カールス・キルヘ） 1716 ~ 37＞ ウィーン

ヨハン・ベルハルト・フィッシャー・フォン・エルラッハ（1656-1723）（建築）、ヨハン・ミカエル・ロットマイヤー（フレスコ）設計  
円蓋内部 1716（1725~30 / フレスコ）

オーストリアのバロックの代表的な建物。ペストの流行の終息を祈願して、カール 6 世により 20 年の歳月をかけて建造された。

円蓋の大きさは高さ 72m で、2 本の円柱の高さは 33m ある。この高さを強調するように、開口の大きさが上部に向かうに連れて徐々に小さくなって行く。

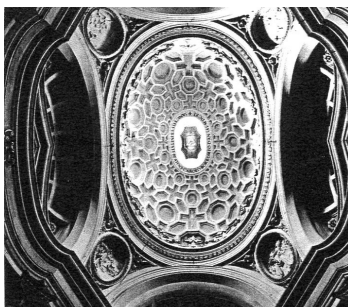


図  
サン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンタネ

＜サン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンタネ 円蓋内部＞  
イタリア

フランチェスコ・ボッロミーニ設計。

楕円形の天井の中に、六角形・八角形・十字型の格間が深く切り込まれている。これらの格間は、いきいきとした蜂の巣状の印象を与え、水晶のような鋭い形態は頂塔の方に向かい、上に行くに従って縮小されているので、そこに錯視の効果が知覚される。

ソームの葉飾りにさえぎられ、下からほとんど見えない窓光により、天井全体は深い影を作らずに輝くという工夫も見られる。これは、物質を

超こくえ、天空に舞い上がる印象を持たせるためである。

#### ＜からかさの家 1961＞

篠原一男設計。

一辺7.5mの正方形平面を持つ平屋の木造住宅。からかさのように放射状に架けられた32本の合掌材により組まれた屋根の下に広がる。この放射状の形が天窓と組み合わせることで、鉛直方向に抜けをつくり視線を上に向けさせる。

篠原はこの作品で一室住居の原型を伝えた。

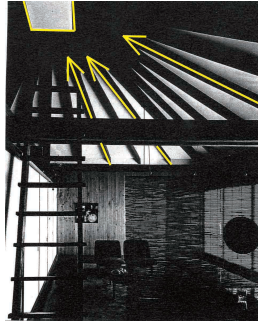


図 からかさの家

#### ＜ジョン・ハンコックセンター 1969＞ アメリカ

スキッドモア・オーウィングズ・アンド・メリル (SOM) 設計。

高さ457.2mの100階建てのビルで、建設当時はシカゴ1の高さ、エンパイア・ステート・ビルに次ぐ世界でも二番目に高いビルであった。外壁にブレースを架け、一体的なチューブとして考える新しい構造手法を提案したビルで、後にノーマン・フォスターの香港上海銀行ビルなどでも用いられている。上階にいくほど先の細くなるデザインは、遠近感を強調するデザイン。

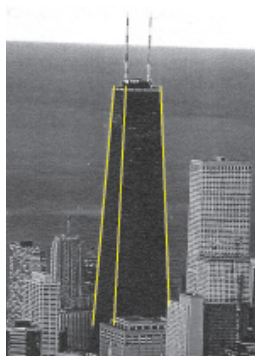


図 ジョン・ハンコックセンター

#### ＜リウム美術館 2004＞ 韓国

リウム美術館内、古美術展示の Museum1 の吹き抜け。マリオ・ボッタ設計。吹き抜けに開けられた開口が螺旋状に並び、吹き抜けの形状の逆円錐型も作用し、実際よりもかなり巨大な吹き抜けに見える。

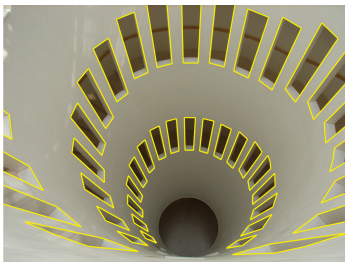


図 リウム美術館



## 1.2.6' 上方のぼかし

建築において、「内部空間」を作り出す上で、天井や屋根の存在は不可欠である。これにより内部空間や建築の高さは必然的に有限になる。「上方のぼかし」という手法はこの有限性をぼやかす（＝高さが曖昧になる。正確に認識出来ない。）ことにより、高さを強調する建築的手法である。錯視の一部の手法であるが、具体的な高さを分ける天井と壁との境界線を強調し、変化を持たせるのが常套的な手法。

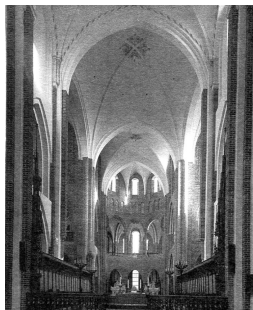


図 ロスキレ大聖堂



図 アマリエンブルグ荘



図 オテル・ド・トゥールーズ



図 ストックホルム市立図書館

＜ロスキレ大聖堂 1215~1300 頃＞ デンマーク

放射状の祭室のない聖堂。煉瓦造にしっくいを塗って仕上げている。柱の色はそのままに、上部の色を白く塗ることで、天井の存在を極めて薄いものにしている。また、天井のヴォールトの形状も四本の柱から白い膜を張ったかのような印象を与える。具体的な「高さが高い」ことの強調ではなく、明確な高さ認識を避けることで上方向への広がりを感じさせる。

＜アマリエンブルグ荘 鏡の間（中央広間）1734~39＞ ドイツ

フランソワ・ド・キューヴィリエ 設計。 ニュンフェンブルグ宮殿内の小宮殿。ロココ建築。

壁や、天井と壁の間の稜線の豪華で緻密な細工と比較し空白を持たせた天井。また、天井の中央に向かって枝葉が伸びたようなデザインも見られ、更に天井のぼかしを強調している。

＜オテル・ド・トゥールーズ 黄金の広間 1713~19＞ フランス

ロベール・ド・コット (1656-1735) 設計。ジュール・アルドゥアン＝マンサールの弟にあたる彼は、建築・装飾に関するあらゆる分野で創作活動を行い、フランスの典型的美学を体現する建築家として国内外で活躍した。

この黄金の間では、前述した例と同じ手法が見られるほか、天井画の湾曲した歪みは、天井を膜のように浮かせる印象をより一層つよめている。

＜ストックホルム市立図書館 1928＞ スウェーデン

エーリック・ゲンナール・アスプルンド設計。

メインとなる、本がぐるりと並んだ開架式の大閲覧室の天井は白く、上部に向けて心地よく空間の抜けが生じている。